〔書　評〕

名嘉真三成著

『琉球方言の古層』

内間直仁

日本語は大きく本土方言と琉球方言に区画される。琉球方言はさらに奄美・沖縄方言と先島方言（宮古・八重山・与那国）に分かれる。日本語の比較研究にとって、本土方言、奄美・沖縄方言，先島方言の三者は基軸となる方言である。

これまでの琉球方言研究は、おゝざっぱに言って、次のような過程で行なわれきた。まず、第一段階としては、ある特定地域の方言を対象として研究したものがあらわれる。チェンバレン『日琉比較文典』(1895）を嚆矢として、金城朝永『那覇方言概説』(1944、三省堂)、国立国語研究所『沖縄語辞典』(1963）などがそれである。これらは首里・那覇方言を研究対象としたものである。奄美では、寺師忠夫『奄美方言の研究』(1956～58、自家謄写、後に『奄美方言、その音韻と文法』として1985年根元書房より発刊）などがあり、八重山では、宮良當壯『八重山語彙』(1930、東洋文庫)、平山輝男・中本正智『琉球与那国方言の研究』(1964、東京堂）などがある。第二段階としては、平山輝男・大島一郎・中本正智『琉球方言の総合的研究』(1966、明治書院)、同『琉球先島方言の総合的研究』(1967、明治書院）などに代表されるように、同一研究者による音韻・文法・語彙にわたって奄美諸島から与那国に至る琉球諸方言を調査研究したものがあらわれる。これで琉球方言全体の概観がほゞできるようになった。第三段階としては、特定分野について、琉球方言全体を調査し、比較研究したものがあらわれる。中本正智『琉球方言音韻の研究』(1976、法政大学出版局)、内間直仁『琉球方言文法の研究』(1984、笠間書院)、野原三義『琉球方言助詞の研究』(1986、武蔵野書院)などがそれである。第四段階としては、比較的研究の遅れていた語彙を中心とする研究があらわれるようになる。長田須磨子他『奄美方言分類辞典　上下』(1977、1980、笠間書院)、仲宗根政善『沖縄今帰仁方言辞典』(1983、角川書店)、平山輝男他『琉球宮古諸島方言基礎語彙の総合的研究』(1983、桜楓社)、同『奄美方言基礎語彙の研究』(1986、角川書店)、同『南琉球の方言基礎語彙』(1988、桜楓社）などがそれである。

以上のような状況の中で、今回名嘉真氏が永年にわたる研究をまとめて大著『琉球方言の古層』として出版した。氏は宮古方言をネイティブとする。宮古方言は先島方言の中でも特色のある方言である。それをネイティブとする研究者による宮古方言の本格的解明が待たれていたが、本書はこれにこたえたはじめてのものである。琉球方言全体を見渡しながら、宮古方言の古層、さらに琉球方言の古層にせまろうとする意欲的な研究書となっている。研究者にとってはとてもありがたい。

本書の章立ては次のようになっている。

第1章　序論

第1節琉球方言の古層、第2節宮古方言の古さと新しさ、第3節古典文法と宮古方言、第4節ネフスキーと宮古方言、第5節方言にあらわれた男女差

第2章　音韻論

第1節奈良朝中央語乙類のi母音と琉球方言、第2節琉球方言の高母音化現象、第3節南琉球方言のハ行子音、第4節音韻の記述的研究

第3章　文法論

第1節琉球宮古方言の動詞終止形の成立、第2節琉球宮古方言の動詞の接続形、第3節宮古方言の上一段動詞の四段化現象、第4節動詞活用の記述的研究、第5節琉球方言の形容詞、第6節琉球宮古方言の形容詞、第7節形容詞活用の記述的研究、第8節宮古方言の代名詞、第9節宮古西原方言のアスペクト、第10節宮古西原方言の助詞、

以上の章立てからもあるていど把握されるように、本書は音韻または文法という特定分野に関するものではなく、音韻・文法の両分野にわたって、両者を関連づけながら琉球方言の古層にせまろうとしたものである。従来の分野別の研究、たとえば音韻の研究であっても決して文法を無視しているわけではない。また文法の研究も音韻を無視してできるものではない。ただ限られたスペースの中で、広く記述的研究にも重点をおかざるをえない状況で、両分野にわたることにためらいを覚えたというのが実情である。しかし、それでもなお音韻研究には文法の記述説明が十分でなく、反対に文法研究には音韻の記述説明が十分でなかったという点は否めない。その点、本書が両分野にわたって記述し、古層の考察を試みたことは高く評価される。

第1章は琉球方言の音韻・文法に関する概説である。国語学に詳しくない方にもいくらか理解しやすいように論述した（序文）とあるが、第1節から第3節までは、音韻・文法における古層の問題が論じられていて、専門とする人でもじっくり読まないとわかりづらいのではなかろうか。古層を求める方法が服部四郎博士の日本祖語論に全面的によっているので、本書の推定した古層を理解するには、まずもって服部博士の日本祖語論（「琉球方言と本土方言」『沖縄学の黎明』1976年、沖縄文化協会、などでみることができる）について理解していなければならないということがある。

第2章は、音韻における琉球方言の古層を服部博士の上代語6母音説と日本祖語論に基づいて考察したものである。具体的には上代語の乙類i母音が琉球方言でどうあらわれるかを踏まえつつ、乙類iの祖形について考察したものである。たとえば、上代語の「き(甲)」(服部説ではその音価をkjiとみる)は、奄美大島大勝ではkʔi（またはki)、沖縄首里ではtʃi、宮古ではkˢīとなるので、日本祖語としては*kiが推定され、それらの関係は次のようになるという。

上代　日本祖語　　琉球方言

kji ← *ki　　→ kʔi(ki)（大勝)、tʃi（首里)、kˢī（宮古）

一方、乙類の「き」(服部説ではその音価をkiとみる)は、琉球方言では次の二つのグループに分かれるという。(1)甲類と同じように、kʔi(ki)（大勝)、tʃi（首里)、kˢī（宮古）となるもの。(2)kī(大勝)、ki(首里、宮古)となるもの。これらの現象を説明するにあたって、

服部博士の次のような祖語論を援用する。

奈良中央	日本祖語	琉球
i(乙)〔長短未詳〕	※i:(乙)←※ui	⟶※i:
	※e:(乙)←※əi	
e(乙)〔長短未詳〕	※ɛ:(乙)←※ai	⟶※e:

これに基づくと、前記(1)のグループに属する、たとえば「月」、(2)のグループに属する、たとえば「木」などの琉球方言は、日本祖語から次のような変化過程で説明されるという。

日本祖語　　琉球方言

※tukui（月）→※tuki:→ tsi̥ki（大勝），tsi̥ʧi（首里），tsi̥kˢĩ（宮古）

※kəi（木）　→※ke:→ kĩ（大勝），ki:（首里、宮古）

ところで連用形「ひ（干）」は乙類で、それに対応する音節は琉球方言で çi（大勝）、Φi（首里）、pˢĩ（宮古）などのようにあらわれ、前記(1)グループに属している。一方、その交替形は po であるから、「木」の場合と同様、日本祖語形は※pəi としなければならない。しかし、(1)グループに属することを重視すると、※pui と再構した方が妥当であろうという。

名嘉真氏が「ひ（干）」の祖形を※pui にしたのは、琉球方言の実態を重視したからであるが、一方では上代語にその交替形として Φo（古くは po）があるという事実も否めない。服部説を継承し発展せしめていくためにも、今後このような例を多くとりあげて検討していく必要があろう。同様に、sĩgiᶻĩ（過ぎる）なども、※sugui（祖形）→※sugi: から本来ならば sĩgᶻĩĩ となるべきところを sĩgiᶻĩ となっているのは、ukiᶻĩ（起きる）などに類推した結果だとみているが、類推変化にもっていく前に祖形そのものものの検討が必要となるかもしれない。ともあれ、服部説を踏まえて琉球方言の古層にせまろうとした試みは、一つの方法論として評価される。

本書では、琉球方言の高母音化現象についてもふれている。琉球方言はもと a、i、u、e、o の5母音であったが、e→ĩ、e→i や o→u という高母音化が起こり、たとえば現在の沖縄方言では、基本的には a、i、u の3母音組織になっている。沖縄方言における子音の口蓋化現象、ハ行子音の変化、あるいは宮古方言における i→ĩ の変化なども、すべてこの高母音化と密接に関わっている現象である。これについては、既に伊波普猷「琉球語の母音組織と口蓋化の法則」（1930、全集第4巻、平凡社所収）というすぐれた論考があり、後に中本正智『琉球方言音韻の研究』（既出）によってより一層深められたといえよう。この高母音化の要因の一つとして、中本氏は ai→ɛ:、au→ɔ: などの類似母音が e、o の周辺に発生したためであるとした。これに対して加治工真市氏から「ai→ɛ:、au→ɔ: が、e→i、o→u の要因であるとすれば、ai→ɛ:、au→ɔ: とならない宮古・八重山方言などはどう解釈すればよいのであろうか」（「中本正智著『琉球方言音韻の研究』を読んで」沖縄文化46号、1976、沖縄文化協会）という鋭い指摘がなされ、それに対して中本氏は、高母音化そのものは融合変化がなくても起こりうる変化であったと答えている（「加治工真市氏の母音変化の問題点に答える」沖縄文化47号、1977）。この高母音化の要因については、これ以上の展開はみられず、

名嘉真氏の本書でも同様であるが、名嘉真氏は宮古方言における連母音の融合状況の資料を比較的多く示していて価値が高い。

第3章は文法論で、宮古方言の動詞終止形や接続形の成立などについて論じている。琉球方言の終止形の成立については、私もかつて論じたことがある(『琉球方言文法の研究』既出)。そこで提示したみかたは、今も訂正の必要を感じていない。

さて、宮古方言の終止形の成立についての名嘉真氏のみかたを概述すると、以下のようになる。宮古方言では、四段動詞「書く」「漕ぐ」「買う」「飛ぶ」の終止形に、四つの形式があらわれる方言と二つの形式しかあらわれない方言とがあるという。前者をI類、後者をII類とすると、I類に属するのは狩俣、西原、仲地、長浜の各方言で、それ以外はII類に属するという。I類から狩俣方言、II類から平良方言を例にとって、「書く」で例示すると、次のようになる。

I類(狩俣)		II類(平良)	
終止形1	終止形2	終止形1	終止形2
kakĩ	kakĩm	(ナシ)	(ナシ)
kafu	kafum	kakĩ	kakĩm

I類の方言で四つの終止形があらわれるのもカ行、ガ行、ハ行、バ行の上記四段動詞に限ってであって、それ以外はII類と同じように二つの終止形しかあらわれないという。宮古方言に二つの終止形があらわれるということについては、従来の研究でも明らかにされていたが、四つの終止形の存在を指摘したのは、本書がはじめてである。

これら終止形の成立について、本書では、まずI類のkafu、kafumとII類のkakĩ、kakĩmが対応し、次のような変化をへたものとみている。

I類		日本祖語		II類
kafu	←	*kakiwori	→	kakĩ
kafum	←	*kakiwormo	→	kakĩm

推定形の*kakiworiは「書き居り」に対応し、*kakiwormoはkaki-wor-moからなり、kakiは「書き」、worは「居り」の語幹、moは意志推量の助動詞にそれぞれ対応するものである。これは服部博士が奄美・沖縄方言の終止形の祖形として提示したものを宮古方言にもあてはめたかたちとなっている。

次に、I類のkakĩは日本祖語の連用形*kaki(書き)に対応するとみている。また、I類のkakĩmはカ行、ガ行、ハ行、バ行以外の動詞の終止形(これは二つの終止形しかあらわれない)、たとえばpusĩm(干す)などに類推して成立したものであろうとみている。

宮古方言をネイティブとする名喜真氏の考察なので、私見を排して、上記祖形に至るまでの考察過程を忠実にたどったつもりである。しかし、以下の点はやはり疑問として残らざるをえなかった。

1) 空間的にさほど広いわけでもなく、地理的にまとまった同じ宮古方言の中で、形も用法もほとんど同じであるI類のkakĩ、kakĩmとII類のkakĩ、kakĩmを、なぜ別系統の語とせざるをえないのか。繰り返しになるが、I類のkakĩは日本祖語の連用形*kaki(書

き）に対応し、kakīm は二つの終止形しかあらわれない動詞の終止形、たとえば pusīm（干す）などに類推して成立したものであるという。一方、II類の kakī は*kakiwori（書き居り）に対応し、kakīm は*kakiwormo からなるとみている。

2) II類の kakī が*kaki（書き）に*wori（居り）を複合させたものであるならば、表現上においてそれを複合させる必然性があったはずである。それがまた*wori を脱落させて、結果的には祖形の連用形に対応するI類の kakī と全く同形にならざるをえなかったのはなぜか。しかも、奄美方言では*wori の複合した kakjuri などは、*wori を脱落させて kaki などとなった例はみない。徳之島方言の kaki（書く）は「書き」に対応するもので、*wori を脱落させたものではないであろう。

3) I類の kakīm は類推により成立したという。ならば、I類はそれ以前は kakī、kafu、kafum の体系だったと考えられる。kakīm のところは空白だったとはいえ、kafum と用法がほとんど同じである kakīm を類推によって補わざるをえなかった理由はなんであろうか。この四つの終止形をもつ体系は、カ行、ガ行、ハ行、バ行の動詞に限られていて、宮古方言全体からみれば、むしろ特殊である。その特殊の方向へ類推が働いたということであろうか。

唐突に疑問だけ提示してもわかりづらいので、以下名嘉真氏の論述に添いながらみていくことにする。まず、I類の kakī が古形の連用形*kaki（書き）に対応するとみた点は、宮古方言の音韻法則からしても妥当で、全く異論はない。奄美徳之島方言の kaki（書く）もそれと同系統のものと解される。

次に、I類の kafu は*kakiwori（書き居り）からなるとみている。この kafu は連用形 kakī（書き）と同じように、連用法にも用いられるが、kakī → kafu の変化によって成立したものとは考えられないという。その理由として、① kafu と kakī は年齢層による違いではない、②この二形は同一の文体レベルにおいて機能を異にする、③ kī → fu の音韻変化を引き起こす音韻的条件はありえない、④狩俣方言などにあらわれる条件形 kafuriba（書けば）は*kakiworeba（書き居れば）に対応すると考えられる、などをあげ、従って kafu は*kakiwori からなると推定している。

さて、①の理由は、kī → fu の変化を考えるにあたって、なんら障害にならないのではなかろうか。現に国語の音便形は kakitari（書きたり）→ kaita（書いた）と変化したものであるが、連用形 kaki も音便形 kai も年齢層に関係なく用いられている。②の理由も障害にならないのではなかろうか。「同一の文体レベル」というのが同一文脈という意なのかよくわからないが、共時的に機能を異にする形式は同一の祖形にさかのぼれないかというと必ずしもそうではない。国語の音便形と連用形は、下接させる接辞を異にするが、同一の祖形にさかのぼれる。琉球方言では、*aꜜiworimu（合ひ居りむ）が一方では ʔaːjuɴ（合う）となり、他方では ʔoːjuɴ（喧嘩する）ともなる。他にもあるが割愛する。③の理由もどうであろうか。『琉球先島方言の総合的研究』（既出）の第4編「語彙」のところをみただけでも、「昨日」は kīnu（上地）、n̥nu（池間）がとりだせる。池間の n̥nu は kīnu → kunu → n̥nu となったものであろう。なぜなら、池間では「雲」は m̥mu、「汲む」は m̥mi となるからである。

宮古方言では ï → i となるところもあるが、ï → u となるところもある。たとえば、「咳」は isakï（上地）、isagu（池間）、ssaku（多良間仲筋）となる。また、「作る」は tsi̥fuˀï（平良）、tʃu̥fu:（池間）、「薄い」は pï̥sï̥kaɲ（大浦）、pi̥sumunu（上地）、「盗人」は nusï̥tu（大浦）、nusudu（池間）となる。中本氏の『琉球方言音韻の研究』（既出）では、狩俣方言で kï → fu の変化がみられるとして、kafu（書く）、ifu̥（行く）、mafu̥（巻く）、tsï̥fu（作る）などの例があがっている。池間にも同様の現象があるとして、nafu（泣く）、kafu（書く）、aifu（歩く）、jafu（焼く）などの例をあげている。ï → u の変化は八重山方言になるとさらに顕著になる。その代表例が八重山鳩間方言で、pusu（人）、sukuɲ（敷く）、sukuɲ（聞く）などとあらわれる。いちいち例はあげないが八重山大浜方言も全く同様に ï → u の変化がみられる。以上の例からすれば、kakï → kaku → kafu の変化は認められるのではなかろうか。④の理由もいささか疑問を抱く。狩俣方言の条件形 kafuriba（書けば）を直ちに沖縄南部の糸満方言の kako:（書けば）、奄美加計呂麻島諸鈍方言の kakjurba（書きおれば）に結びつけて、*kakiworeba からなるとみる。この④の理由は、kafu の祖形を*kakiwori とする大きな拠り所となっているが、狩俣の kafuriba と奄美諸鈍の kakjurba は、はたして同系であろうか。狩俣の近くに位置する大神方言では makï̥ʃi̥bḁmai（待ちせばも、待っても）、kakï̥ʃi̥bḁmai（書きせばも、書いても）という条件形があらわれる。狩俣の kafuriba は、この大神の kakï̥ʃi̥bḁ と関係が深いのではなかろうか。kakï → kafu にともなって、ʃi̥bḁ → riba となったと解される。宮古方言では r と s の交替がみられる。たとえば、大浦方言などでは kï̥sï（着る）、kï̥sï（切る）とあらわれ、i の直後では r → s の交替がみられる。一方、「沸かす」は大浦では fukaï という。末尾の ï は「リ」に遡源されれるものである。

以上述べてきたところからもわかるように、I 類の kafu は*kakiwori からなるとみるよりは、kakï の祖形と同様、古形の連用形*kaki（書き）に対応し、*kaki → kakï → kaku → kafu と変化したものとみた方がより妥当と考えるが、いかがであろうか。この変化が認められれば、I 類の kafum も kakïm → kakum → kafum の変化をへたものという結論を得ることになる。

次に、I 類の kafum、II 類の kakïm を、名嘉真氏は祖形*kakiwormo にさかのぼる。その根拠として宮古方言の形容詞はカリ活用で、「あり」が複合しているから、動詞にも「居り」が複合したであろうとみている。しかし、なによりも宮古方言の音韻法則に従えば、kakïm は*kakimu にしかさかのぼれないのではなかろうか。*kaki は古形の連用形「書き」、*mu は意志・推量の助動詞「む」にそれぞれ対応するものである。奄美・沖縄方言の動詞はほとんど「居り」に対応する形式が複合しているが、ただ wuɲ（居る）、ʔaɲ（ある）のみは、宮古方言と同じように、*worimu（居りむ）、*arimu（ありむ）からなると私はみている。

以上述べてきたところをまとめると、宮古方言の終止形は、*kaki（書き）→ kakï（平良、狩俣など）→ kaku（大浜など）→ kafu（狩俣など）、*kakimu（書きむ）→ kakïm（平良、狩俣など）→ kakuɲ（大浜など）→ kafum（狩俣など）のように成立したものとみた方がより妥当ではなかろうか。これはもちろん*ki → kï → ku → fu に中心をおいた変化過程であ

り、末尾の m、ɴ も含めると、もう少し立体的なものになる。このように考えると、*kaki を基点として宮古・八重山方言の終止形は一元的に説明されて、類推という説明原理も必要としない。

宮古方言の接続形についても、本書では奄美・沖縄方言同様、連用形に「て」がついて形成されたとみて、*kakite（書いて）が kaki（平良など）または kattʃi（仲地など）になったとしている。宮古方言の接続形は、私の調査によれば、たとえば「書いて」は kakisi̥ti(大神)、kakitti（西里、与那覇、来間など）、kaki:（池間など）とあらわれる。大神の kakisi̥ti は「書きして」に対応するもので、si̥ti は西里などほとんどの地域では促音化して tti となっている。この si̥ti は「て」の複合したもので、上接の kaki の接続用法を補うものとして後から加わったものであろう。さて、西里などの kakitti の kaki を本書では「書きて」に対応するとみているが、もしそうであるならば kakitti は「書きてして」に対応するということになり、琉球方言では例をみない祖形ということになりはしないか。

以上いろいろ私見を述べたが、今後の多角的な議論を期待すればこそである。本書の論述は、その議論の場をつくるのに大きく寄与している。本書の記述研究も、記述に独自の工夫がみられる。たとえば、音韻では上代語の甲類乙類との対応関係がわかるように記述されているし、活用の記述でも印刷での煩わしさと妥協しないで、体系に中心をおいた記述となっていて、今後の比較研究になくてはならないものとなっている。宮古方言をネイティブとする名嘉真氏による本格的な宮古方言研究という点でも貴重なものとなっている。琉球方言を研究するにあたって、つくづく思うことは、記述研究の重要性である。記述研究はいくらあっても足りるものではない。著者の宮古方言研究が本書を土台として、ますます深まることを期待する。

(1992 年 12 月 30 日発行　第一書房刊　A 5 判　742 頁　20000 円)

——千葉大学教授——

(平成 5 年 12 月 6 日　受理)